

## 第78回 調整力及び需給バランス評価等に関する委員会 議事録

日時：2022年10月19日（水） 14：30～16：30

場所：Web開催

出席者：

大橋 弘 委員長（東京大学 副学長 大学院経済学研究科 教授）

秋元 圭吾 委員（(公財)地球環境産業技術研究機構 システム研究グループリーダー・主席研究員）

安藤 至大 委員（日本大学 経済学部 教授）

小宮山 涼一 委員（東京大学大学院 工学系研究科 教授）

馬場 旬平 委員（東京大学大学院 新領域創成科学研究科 教授）

オブザーバー：

池田 克巳 氏（㈱エネット 取締役 東日本本部長）

市村 健 氏（エナジープールジャパン㈱ 代表取締役社長 兼 CEO）

田山 幸彦 氏（東京電力パワーグリッド㈱ 執行役員 系統運用部長）

西田 篤史 氏（関西電力送配電㈱ 執行役員 工務部・系統運用部担当）

野村 京哉 氏（電源開発㈱ 取締役 常務執行役員）

増川 武昭 氏（(一社)太陽光発電協会 企画部長）

中島 亮 氏（資源エネルギー庁 省エネルギー・新エネルギー部 新エネルギーシステム課 課長補佐）

迫田 英晴 氏（資源エネルギー庁 電力・ガス事業部 電力基盤整備課 電力供給室長）

欠席者：

松村 敏弘 委員（東京大学 社会科学研究所 教授）

配布資料：

（資料）議事次第

（資料）調整力及び需給バランス評価等に関する委員会 定義集

（資料1）電力需要想定の在り方に係る検討について

（資料2）確率論的必要供給予備力算定手法（EUE算定）における諸課題の検討について

（資料3）電力需給検証報告書（案）について

（資料4）2023年度の需給見通しについて

議題1：電力需要想定の在り方に係る検討について

- ・事務局から資料1により説明を行った後、議論を行った。

〔確認事項〕

- ・今後の需要想定において日負荷率を用いたH3需要想定の手法を採用する。
- ・需要想定へのスマートメーターのデータ活用や、太陽光の自家消費影響、ロードカーブの夏季実績の分析等を引き続き検討する。

〔主な議論〕

(馬場委員) データの集計等大変であったと思うが、興味深く拝聴させていただいた。この想定の見直しについては色々な要素がある。スライド18に検討事項があるが、これらの指標について検討することは良いと考える。今回は主としてロードカーブについて説明いただいているが、例えばスライド23を見ると、コロナの影響でロードカーブというのはこれほど変わるのだと非常に興味深く思った。ただ、2019年度と比べて2021年度はカーブが変わっているということだが、2020年度から比べるとまた元に戻りつつあり、2022年度もどうなっているのか知りたいところである。コロナというインパクトの高い事象はあったが、今はwithコロナとなり徐々に元のところへある程度までは戻ってくるという過渡期であると考え。そういった意味で最後のまとめにあった通り、引き続きデータを集めて注視していくことが重要であると思った。在宅率が高くなっているということだが、一方で業務用のところがあまり変化がないということで非常に興味を持って見ていた。スライド43にあった通り、これからの算定については日負荷率を使った方がいいとのこと、確かにそう思う。ただ、そういうものを使っていくということであれば、日負荷率というものが正しく推定できているかが大きく効いてくると考え、先程と同じく継続的に変化を精査していただくことが重要かと思う。特に反対意見ではなく感想である。

(秋元委員) 馬場委員の発言とほぼ同様の感想となるが、なんとなく想像していたことを定量的なデータとしてきちり示していただき、学問的にも価値のある分析と思い聞いていた。在宅勤務という中、特に関東エリアの在宅勤務率は高いため、あがる状況になっている。また、完全に在宅勤務へ切り替わっているというよりは出社勤務との両立という状況のため、業務の方はあまり動きがないという形かと思いデータを見ていた。43ページの日負荷率に着目する点に関しては同意であり、この方向で良いかと思うが、在宅勤務率が段々下がってくるであろう中で、この戻りをどう読んでいくかは難しいところである。withコロナで在宅勤務率をどれくらい維持するのか、このまま単調に戻っていきコロナ前に完全に逆戻りするのか、一部については在宅勤務という形態が続くのか、それによって今後の電力需要の予想は変わってくる。この読み方によってどう考えていくかが決まってくる感じもしたため、悩ましい思いで聞いていた。何れにしても、そういう状況も踏まえ電力需給ひっ迫にならないようある程度保守的に見ていくことも重要で、検討する材料として重要な材料をいただいた。45ページの5項目、スマートメーターのデータ活用は今後ますます重要になってくると思う。資料記載の通り、用途別等の集計とデータの蓄積は重要であり、引き続きデータを蓄積しながら有用な活用方法を考えていくことは今回の課題に関わらず重要なことと考えるため、ぜひ色々検討していただきたい。今回の貴重なデータ作成に感謝する。

(小宮山委員) スライド45記載の結論の通り、夏季・冬季の高需要期のH3需要想定については安定供給を確保することが重要であり、日負荷率を用いてH3需要想定を行なうという方向性に賛同させていただく。今回の説明を踏まえた結論として、在宅率等が地域別により特性が異なる点が重要

な分析結果と認識している。特に需要の大きい関東圏、関西圏については在宅率、日負荷率の影響が非常に大きいということを示唆しており、都市圏については日負荷率でしっかり需要想定を見ていくことは重要であるという示唆が得られる分析結果であったと見ている。但し他の委員からも意見があった通り、今回の分析結果を見ると、2020年度から2021年度にロードカーブの戻りが見られるということで、どこが定常状態なのか見極めが難しい状況にあるため、引き続きその点は注視した上で日負荷率を採用した手法で需要想定をしていくことが大事と感じた。最後にもう1点、特に業務部門については非常に興味深い分析結果が出ていると思った。電力需要とロードカーブの形状が双方ともにほぼ変化が見られていない。理由ははっきりしていないと思うが、おそらくベースロード的な情報機器の普及進展がかなり影響しているのではないかと個人的には推測している。業務部門の需要が今後増加する可能性も十分あるかと思うため、その点しっかり見ていく必要があると考える。これまで電力需要の想定はマクロ的視点中心で行なってきたわけだが、今回のスマートメーター等、データの利活用が可能になればミクロ的視点での分析も可能になり、それをどのようにマクロ的な分析に繋げていくか手法上の検討も進めていただきたい。

(西田オブザーバー) タイトルは需要想定ということであったが、全般を聞いているとどちらかという短期断面の需要想定について整理をいただいたものと認識している。その観点で2点ほど意見させていただきたい。1点目は需要の構造的変化を日負荷率を使って追いかけていこうということかと思うが、例えば今回のコロナ禍による影響やその後のテレワークの浸透といった比較的早く起こってくるような構造的変化を需要想定の中にタイムリーに反映させていくことが非常に大切と考える。その意味ではこの日負荷率をしっかりと見るということも大切であり、併せてできるだけデータのアップデートを早くして、そのデータの検証をすぐ行い需要想定に反映させていくのが大切だと思うため、是非この観点も宜しくお願ひしたい。2点目は冒頭に短期断面を念頭にと申し上げたが、需要想定 of 長期の方も電源の確保という面では重要な指標になっていると考える。例えば10年先の予想がどれくらい当たっていてどういう改善の余地があるかも今後考えていくと、需給安定においてより良い方向になると思うため、長期の観点でもこういった分析を今後機会があればやっていただきたいと、一般送配電事業者としても協力を差し上げたいと考える。

(事務局) 馬場委員、秋元委員、小宮山委員から共通したコメントをいただいたが、これから先の負荷率をいかに想定していくかについてはやはり非常に重要なポイントと考えている。地域事情を踏まえた想定について一般送配電事業者と2023年度供給計画策定においてよく検討を進めていきたい。また、西田オブザーバーから指摘いただいた長期部分の検討について、今回の検討では2023年度供給計画に間に合わせられるよう即戦力的な課題を検討しているが、将来的な課題として外部の知見を入れるといったことも選択肢としながら一般送配電事業者と相談させていただきたい。

(大橋委員長) 議題1は供給計画或いは需給検証での需要想定について、その在り方を検討いただいた。特にコロナ禍の影響を見るに当たって、ロードカーブの変化がどういう形であったかを分析していただき、H3需要想定の中で平均を最大で割ったものである日負荷率の影響を確認した。今後H3需要想定については日負荷率を勘案したものが良いとの整理をいただいた。事務局からあったように議論は今日で終わっておらず、太陽光の自家消費や、委員、オブザーバーからコメントいただいたスマートメーターの活用も含めて、今後引き続き検討をしていく。需要想定は大変重

要な作業のため、今回も丁寧にやっていただき感謝しているが、引き続き宜しくお願いしたい。

## 議題2：確率論的必要供給予備力算定手法(EUE算定)における諸課題の検討について

- ・事務局から資料2により説明を行った後、議論を行った。

### 〔確認事項〕

- ・厳気象対応について、春・秋については2%、夏・冬については3%を織り込む方針とする。
- ・年間計画停止可能量について、容量停止計画の調整動向、実運用段階での調整代等の諸要因を確認のうえ見直し要否を判断する。
- ・調達方法の整理や停止計画の調整状況の確認等、引き続き検討を進める。

### 〔主な議論〕

(池田ワザバー) 厳気象対応について2点、kWの調達方法について1点、コメントさせていただく。1点目は確認である。スライド13に春と秋の厳気象対応分は各月平均で2.6%となったとの記載がある。議題1で現在H3需要想定の見直しを行なっている段階との説明があったため、この2.6%の数字が今後変わってくるものと認識しているが正しいか確認したい。夏と冬の厳気象対応分も同様かと思うが、見直しの中でH3需要想定をベースに今後はH1需要想定も見直されることを考えると、現時点で提案の春と秋は2%、夏と冬は3%という数字が適当であるかの判断が難しいのではないかと考える。2点目はスライド18に記載の通り、H1需要想定とH3需要想定の間格差が夏と冬で異なるということであれば、夏と冬で厳気象対応分の量を変える方法、更には春や秋も含めて月毎に厳気象対応分を設定するという方法もあり得るのではないかと考える。3点目はスライド22、厳気象対応の計算結果が整理され、確率論的評価というより、確定論的に厳気象リスク対応分の供給力を上乗せしていく方向性が窺える。これは安定供給のために供給予備力をどれだけ持つておくことが必要かという視点に立った整理と思慮する。当然このような視点も重要なものと思うが、議論開始当初の容量市場の目標調達量にも作用する確率論的評価にはどのようなリスクを織り込んでいくべきかという議論と少し離れた議論になりつつあると思う。また、国の方でも予備電源の確保に関する議論が行われているが、年間商品である容量市場で全ての供給力を確保することはリスクの実態に沿っておらず、非効率が生じることを踏まえた議論と承知している。以上のことから、kWの調達について考える際は調達方法を容量市場に限定することなく、資料に記載の通り、kW調達の在り方について継続して検討を深めていただきたい。あくまで1案だが、EUE評価にはどのようなリスクを盛り込むことが適切かというテーマと、安定供給を実現するために計画時点で想定需要に対してどれだけ予備力を持つておくことが適切かというテーマは別物として考えて、前者を基に容量市場のオークションを実施し、それ以外は必要に応じて、例えば、予備電源の確保のような補完策を講じるという整理もあり得ると思っている。

(野村ワザバー) 2番目の年間計画停止可能量についてコメントしたい。スライド32の年間計画停止可能量については発電事業者として夏と冬の計画停止は極力回避した上で広域機関からの計画停止調整の要請には可能な限り協力しているものの、様々な制約により調整ができないということも

ある。或いは停止期間が長く、どうしても夏と冬に停止がかぶってしまうといったこともあるのが実態である。また、2019年度以降増加傾向ということが記載されているが、グラフで示されているように2018年以前と比較すれば同程度ということもいえるのではないかと思う。スライド33の計画停止可能量の見直し要否については、実際の容量停止計画の調整状況も確認の上で判断という点に異論はないが、設備の信頼度維持のために適切な補修停止は必要不可欠と考えているため、実態を踏まえた検討をお願いしたい。

(田山オブザーバー) 厳気象対応の試算と年間計画停止可能量に関する検討に感謝する。2点あったと思うが、今回試算いただいた春と秋の厳気象対応分について、春と秋の端境期に需給ひっ迫を経験している立場としては、この厳気象対応分を織り込むことを是非進める方向で考えていただきたい。次に年間計画停止可能量について、スライド37で総括していただいた通り、今後の対応として容量停止計画の調整状況も確認の上で判断するということであるが、この年間計画停止可能量については容量停止計画の調整の状況だけではなく、野村オブザーバー発言の通り、実運用段階での停止調整に対する調整代も含んだ値であると認識している。そういうことがあって必要な計画停止というのがしっかり入っていけるのだと思っており、実運用段階も見据えた判断をお願いしたい。スライド29-31で過去3年分の試算もしていただいているが、一般送配電事業者の実感としては、最低限この2.1月程度の年間計画停止可能量を確保しないと実運用段階での停止調整が困難になるのではないかと考える。引き続き検討をお願いしたい。

(小宮山委員) 説明いただき感謝する。今回の厳気象対応、並びに容量停止計画の方向性について概ね賛同させていただく。スライド8に記載の春と秋のH3需要の厳気象の影響については推定が難しいと考えている。その中で気温の感応度については基本的に採用せず、過去10年の中で最も厳しい需要を踏まえて厳気象の影響を想定することで良いかと思う。過去10年の中で最も厳しい需要を踏まえるということで、長すぎても短すぎてもトレンドをしっかり把握することが難しくなる。その中で10年というのは気象影響を考える上では適切な期間ではないかと感じている。それを踏まえて発電機をその端境期に補修調整で柔軟に対応でき、また、各月平均値ということで保守的に2%というバランスのとれた数字ではないかと思う。最近では電源の補修調整も需要の動向のみならず、再エネの普及等の影響もあり、最適なスケジューリングが必要になって以前よりも考慮すべき要素が増え非常に複雑なものになっていると認識している。今回、春と秋は厳気象2%が良いかと思うが、今後とも需給環境を踏まえて継続的にモニタリングすることも大事であると考え。最後の年間計画停止可能量の見直しの要否に関しては容量市場での実際の容量停止計画の調整状況も踏まえて確認ということで賛同するが、先程意見のあった調整が不良となるリスクもあると考えるため、個人的には保守的に見た上で考えた方が良かった。

(西田オブザーバー) 池田オブザーバーの話に関連するかも知れないが、13ページに平均値2.6%だが「保守的に」2%という表現がある。この「保守的に」というのが需給安定を考えた上で安全サイドに「保守的に」という意味と、容量市場と供給力確保の費用を抑える意味での「保守的に」といった2つの意味があるような気がしている。一般送配電事業者はどちらかというとならば需給運用の方が気になっているので前者の「保守的に」という立場にある。13ページではどちらかというとならば後者の意味での保守性をもって2%とやっているようで、その前提に例えば発電機の補修調整が期待できるといったことが書かれている。この発電機の補修調整については後述で実態2.1ヶ月だが容量停

止計画の方の状況を見てしっかり確認するとある。最終的にどういう答えになるか分からないが、費用を抑える面での保守的に考え1.9ヶ月のままということであれば、全体を通して供給力確保の費用を抑える方を重視して数字を決めようということになるかと思う。それが結論であればそれでもいいが、最終的にどういう考え方に立って今回数字を見直すかを明確にしておいた方が、その数字の意味が皆さんの中で共有できると思う。最後にまとめる段階では、「保守的に」という言葉よりも、もう少し丁寧に今回の数字の決め方を整理しておいた方が良いと感じた。

(秋元委員) 丁寧に分析いただき有用な情報を示していると思う。委員、オブザーバーから様々な意見があったが、夏と冬に関しては3%、春と秋については2.6%という数字は出ているが2%という事務局の提案に関して今回はこれで良いと考える。ただ、西田オブザーバーの発言はその通りかと思っていて、今回は結論を出していないものの、2.1ヶ月ということが示されている中で、全部保守的に見ていいのかという感じはする。そこに関しては春と秋で2.6%出ており、3%でもいいはずの数字を2%としたということはしっかり認識の上、補修の部分に関してどうするか考えた方が良いと思う。今回ここで結論を出さないとのことで、今回の整理については賛成であるが、次の検討時にその認識を持った上で検討することは必要と考える。どのような調達方法を取るのかに関しスライド37の5項目に記載があるが、大変重要な検討課題だと思うため、今後の検討ということで引き続きその視点を持って全体を見ていく必要があると考える。

(事務局) 池田オブザーバーから確認いただいた需要想定の見直しで今回の数字を見直すかについては、ご指摘の通り継続的な確認は必要と考える。需要想定の見直しに伴いこの水準感が大きく変わることはないと考えており、継続的な確認をさせていただく。また、EUEシミュレーションの確率論に対して検討を進めている厳気象対応、稀頻度リスクを確定的に乗せるというのはマッチしていないのではという点はご指摘の通りと思う。一方で、6月の委員会で課題を頭出しさせていただいた際にも説明している通り、EUEは期待値での評価ということで確率的に非常に小さい事象はリスクが小さく評価されてしまう。その要因も含めて昨今需給がひっ迫していることを踏まえてこういった対応が必要との課題があり、検討、整理をご議論いただいているものと受け止めている。供給力の確保、予備電源の確保についてもご発言いただいたが、予備電源と今回議論の容量市場の目標調達量に係るEUE評価の切り分けについては、次回以降、発電機の計画外停止率にどこまでのリスクを入れるべきかの議題の中で議論いただけるような資料を用意したいと考えている。野村オブザーバー、田山オブザーバー、小宮山委員からコメントいただいた年間計画停止可能量について容量市場の停止調整の調整状況を確認する方針については賛同いただいたと受け止めているが、今回お示しした2.1ヶ月や春秋の厳気象対応の分析結果も踏まえて総合的な判断をというご意見だったと認識している。容量停止調整の調整結果を見ながら、いただいた意見を踏まえて検討を進めたいと考える。西田オブザーバーからご発言いただいた「保守的に」という部分はご指摘の通り、需給安定上の保守的という意味ではなく、従来からの見直し量を保守的にという意味で記載した。「保守的に」という表現とその意味合いについては、ご意見を踏まえて最終的などりまとめの際は見直し、しっかり整理したいと考えている。最後に小宮山委員から発言いただいた、今回の整理は賛同だが継続的なモニタリングをとのご指摘については、その通りと認識しており、引き続きこういった視点での確認は継続していきたいと考える。

(大橋委員長) 今回EUE算定における諸課題ということで、2つの論点である厳気象対応と年間計画停止

可能量の考え方について整理した。厳気象対応については「保守的」という言葉の議論はあったが、春と秋で2%、夏と冬については3%を織り込むことで十分な対応ができるのではないかと、また、年間の計画停止可能量については容量停止計画の調整動向、実運用段階での調整代も重要であろうのご指摘もあり、そうした諸要因を勘案して判断することが重要だろうという議論だったかと思う。今後調達方法の整理等、様々確認すべき事項があると思うが、引き続き検討を進めていただければと考える。今回、委員からも丁寧な検討についてご指摘があったところかと思うが、引き続き宜しくお願ひしたい。

### 議題3：電力需給検証報告書（案）について

- ・事務局から資料3により説明を行った後、議論を行った。

#### 〔確認事項〕

- ・2022年度冬季の厳寒H1需要発生時の電力需給の見通しについて最低限必要な予備率3%は上回っているものの今後の需給状況の変化は引き続き注視する。
- ・今回事務局より説明のあった内容を本委員会の後に「需給検証報告書」として取りまとめ、趣旨が変わらない範囲での修正については、委員長に一任する。

#### 〔主な議論〕

（馬場委員）定例の報告ということではあるが、非常に興味深かったのが、スライド7、8の東京エリアでの夏季の最大需要の分析である。今まで大体このような需要の予測は気温感応度をメインで考えていたが、そこに暑さ指数を入れてやると非常によく合うというところが興味深い話であった。こういった夏季の需要というのは空調による需要かと思う。空気調和で人間が快適に思うところまで使うということを考えてみると、例えば空気調和で人間の快適性としてPMVという指標を使うが、そういったところでも気温や湿度、日射等を使ってそれに近いようなもので暑さ指数というものは作られている。そういった意味では、空調の使われ方と非常に親和性の高い指標を使って今回の分析をされたと思った。今後もこういった指標も参考にしながら需要の想定等されるとより良い想定ができるのではないかと思い、非常に興味深く拝聴したという感想である。

（田山オブザーバー）シート7-10の東京エリアの分析について今回丁寧に説明いただき事務局に感謝する。とりまとめ全体としてはこの内容で異論はない。シート15の最後のとりまとめの2項目で今回揚水発電の運用等にも注意が必要との記載があるが、この場を借りて、弊社の需給ひっ迫での経験や実運用を整理して明らかになった気付きと課題認識について補足をさせていただき、今後の対応についても併せてお願ひをさせていただきたい。弊社での気付きとしては、今年の1月、3月のひっ迫時、揚水発電の供給力の評価についての課題認識を提示しているが、その後6月の東京エリア実績を確認したところ、揚水発電のみならず電源Ⅲ等の供給力についても夏季前に評価いただいた需給検証での想定値と実績値との間に乖離の発生を確認している。具体的には想定値

よりも実績値が下回っていることを確認している。このことから1つの課題認識としては、需給検証で示す予備率よりも当日に予備率が低下するリスクがあるのではないかと考えている。こういった揚水発電、電源Ⅲ等についての課題対応策として、当座の対応としては、目の前に迫っている冬に向けて万全を期する必要があると考える。例えば揚水発電については冬季のロードカーブの特徴や太陽光発電が夏季のように期待できない状況で、連日高需要が発生する状況も考えられるため、揚水発電の潜在出力の特徴を踏まえた予備率管理の考え方の整理が必要と考える。また、電源Ⅲ等については必要な時に稼働停止していたり出力抑制していたりする状況も考えられるため、需給が厳しい時にタイムリーに追加起動、出力増加対応等できるようにすることを、今冬に向けた準備として早急に具体策を検討する必要があると考えている。この検討は2023年度とそれ以降に向けた抜本的な対応として、揚水発電や電源Ⅲ等の供給力の評価内容の再確認、それに伴う必要な見直しは時間がない中ではあるが、2023年度供給計画策定のスケジュールに合わせて具体化していく必要があると考えている。以上の対応策について具体的に広域機関とも連携して今後も検討を進めていきたいと考え、宜しく願いたい。

(小宮山委員) 今回のとりまとめ方向案に賛同する。1点、スライド8で暑さ指数と非常に相関が高いということは重要な知見と考えた。それは今後の最大需要想定にいかに関与するかの点が大事な視点と考える。スライド10に記載の通り、指数であるので、気温のみならず、湿度、日射等が周辺の熱環境、非常に広域的並びに地域的な要因が影響するという点で、最大電力という被説明変数がある、気温、湿度、熱環境の説明変数がある。この説明変数をいかに確度高く予測して、それを基にいかに正確に最大電力を推計するかが問題になってくる。それぞれの説明変数の予測可能性にも依存する問題であるため、手法面含めて総合的に検討を進めていただければと思う。

(秋元委員) 重複して恐縮だが、8ページ目のデータについて、累積的に暑さが需要に効いてくる話は以前からよくされていたので、感覚的にもよく分かり、分析を興味深く見させていただいた。ただ、下に記載の累積の仕方が1:1:1:1:4で合成作成というのは、この比率を変えた場合にどうなるのか、2日前だけを取ったらどうなるのか等、学問的に興味がある。何故この比率にしたのかの考え方が、若しくは沢山行なった結果、これが一番マッチングが良かった等があれば、念のため教えていただきたい。また、冬季の需給改善に対しては大変沢山の皆様の努力のお陰で大分需給の状況が緩和してきた。九州電力も原子力を早期にと相当努力され、他の皆様も同様かと思う。この場を借りて深く感謝申し上げたい。

(事務局) 馬場委員、小宮山委員からいただいたコメントの暑さ指数については今回新たに検討させていただいた。馬場委員からは空調との親和性が高いのではないかと指摘をいただき、その観点も含め引き続き検討をしてみたい。また、秋元委員から質問いただいた累積指数については、様々な荷重を変えて検討しており、その中で今回一番マッチしたのがこの比率であり、試行錯誤した結果となる。田山オブザーバーからいただいた意見については、広域機関としてもこれ

までの需給ひっ迫の経験を踏まえ、揚水の運用、電源Ⅲ等には引き続き注意を図っていく必要があると考えており、この点についてはまずは今冬に向け、東京電力パワーグリッド社並びに一般送配電事業者の協力をいただきながら検討を進めていきたい。

(大橋委員長) 議題3については夏季の需給実績と冬季の見通しについて説明いただいた。夏季については暑さ指数について幾つか質問、コメント等いただいた。安定運用は確保できたということだが、引き続き確認等を進めていただきたい。冬季については最低限の予備率は確保しているとのことであるが、今後の運用、需給状況の変化については注視をしていただきたい。本委員会後に需給検証報告書を取りまとめていくということであるが、その内容については今回特段異論等なかったが、今後分析を深めて欲しいとの依頼があった。基本的に内容を変えない範囲での修文等行なう可能性があるが、そこについては委員長に一任いただけると有難い。その方向で宜しいか。

(委員・オブザーバー) 承知した。

(大橋委員長) 一任いただき感謝する。では、事務局にはその方向で進めていただきたい。

#### 議題4：2023年度の需給見通しについて（報告）

- ・事務局から資料4により説明を行った後、議論を行った。

##### 〔確認事項〕

- ・事務局において、事業者、国とも連携を取り、引き続き2023年度の供給力対策についての検討を進める。

##### 〔主な議論〕

(大橋委員長) 今回この議題は報告事項である。2023年度需給が厳しいことが見込まれ、現在広域機関において発電機の補修点検の時期等調整しているところの途中経過を報告いただいたと理解している。この点について確認事項等あればお願いしたい。

(田山オブザーバー) 予備率が低いエリアを重点的に意識しながら対応していただいていると認識している。最後スライドのまとめの通り、予備率は改善方向ということになっているが、東京エリアの7月が引き続き厳しい状況ということで、揚水発電の供給力評価や電源Ⅲ等の供給力確認も併せて、今後の2023年度の供給計画に向けた対策を一緒に検討を進めさせていただきたいと思う。

(大橋委員長) 事務局においては、田山オブザーバーからの発言もあった通り、事業者、国とも連携を取りつつ、引き続き供給力対策についての検討を進めていただきたく、宜しく願います。

(事務局 大山理事長) 本日も議論いただき感謝する。本日は4つの議題を議論いただいたが、コロナの影響、厳気象、需要のぶれについて議論いただいた。また、年間計画停止可能量、累積暑さ指

数の話もあった。全体を通じて言えることだが、将来の不確実性が高まっている中で経済性にも考慮しつつ安定運用を行なうという難しい課題に取り組んでいるということを再確認したということかと思う。今後ともどうぞ宜しくお願いしたい。

以上